

[B年] 棕櫚の主日(2022年4月10日)**【入堂行列】ゼカリヤ書9章9～10節**

- 9 娘シオンよ、大いに踊れ。
娘エルサレムよ、歡呼の声をあげよ。
見よ、あなたの王が来る。
彼は神に従い、勝利を与えられた者
高ぶることなく、ろばに乗って来る
雌ろばの子であるろばに乗って。
- 10 わたしはエフライムから戦車を
エルサレムから軍馬を絶つ。
戦いの弓は絶たれ
諸国の民に平和が告げられる。
彼の支配は海から海へ
大河から地の果てにまで及ぶ。

【入堂行列】マルコによる福音書11章1～11節

- 1 一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、
2言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。3もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。4二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。5すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。6二人が、イエスの言われたとおり話すと、許してくれた。7二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。8多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。9そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。
「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。」
- 10 我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。
いと高きところにホサナ。」
- 11 こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、辺りの様子を見て回った後、もはや夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた。

【旧約聖書日課】イザヤ書50章4～7節

- 4 主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え
疲れた人を励ますように
言葉を呼び覚ましてくださる。
朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし
弟子として聞き従うようにしてくださる。

- 5 主なる神はわたしの耳を開かれた。
わたしは逆らわず、退かなかった。
- 6 打とうとする者には背中をまかせ
ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。
顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。
- 7 主なる神が助けてくださるから
わたしはそれを嘲りとは思わない。
わたしは顔を硬い石のようにする。
わたしは知っている
わたしが辱められることはない、と。

【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙2章5～11節

- 5互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。6キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、7かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、8へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。9このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。10こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、11すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

【福音書日課】マルコによる福音書14章32～42節

- 32一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。33そして、ベトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、34彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」35少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの方が自分から過ぎ去るようにと祈り、36こう言われた。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」37それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ベトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。38誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」39更に、向こうへ行つて、同じ言葉で祈られた。40再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠ったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。41イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。42立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ゼカリヤ書9章9～10節

- 9 娘シオンよ、大いに喜べ。
娘エルサレムよ、喜び叫べ。
あなたの王があなたのところに来る。
彼は正しき者であって、勝利を得る者
へりくだって、ろばに乗って来る
雌ろばの子、子ろばに乗って。
- 10 私はエフライムから戦車を
エルサレムから軍馬を絶つ。
戦いの弓は絶たれ
この方は諸国の民に平和を告げる。
その支配は海から海へ
大河から地の果てにまで至る。

マルコによる福音書11章1～11節

1 一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山に面したベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、²言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、また誰も乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。³もし、誰かが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」⁴二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。⁵すると、そこに居合わせた人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。⁶二人が、イエスの言われたとおりに話すと、許してくれた。⁷二人が子ろばをイエスのところに連れて来て、その上に自分の上着を掛けると、イエスはそれにお乗りになった。⁸多くの人が自分の上着を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て敷いた。⁹そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。

- 「ホサナ。
主の名によって来られる方に
祝福があるように。」
- 10 我らの父ダビデの来るべき国に
祝福があるように。
いと高きところにホサナ。」

11 こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入られた。り、そして、周囲を一瞥した後、すでに夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた。

イザヤ書50章4～7節

- 4 主なる神は、弟子としての舌を私に与えた
疲れた者を言葉で励ますすべを学べるように。
主は朝ごとに私を呼び覚まし
私の耳を呼び覚まし
弟子として聞くようにしてくださる。
- 5 主なる神は私の耳を開かれた。
私は逆らわず、退かなかった。
- 6 打とうとする者には背中を差し出し

- ひげを抜こうとする者には頬を差し出した。
辱めと唾から私は顔を隠さなかった。
- 7 主なる神が私を助けてくださる。
それゆえ、私は恥を受けることはない。
それゆえ、私は顔を火打ち石のようにし
辱められないと知っている。

フィリピの信徒への手紙2章5～11節

- 5 互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。
- 6 キリストは
神の形でありながら
神と等しくあることに固執しようとは思わず、
7 かえって自分を無にして
僕の形をとり
人間と同じ者になられました。
人間の姿で現れ、
- 8 へりくだって、死に至るまで
それも十字架の死に至るまで
従順でした。
- 9 このため、神はキリストを高く上げ
あらゆる名にまさる名を
お与えになりました。
- 10 それは、イエスの御名によって
天上のもの、地上のもの、地下のものすべてが
膝をかがめ
- 11 すべての舌が
「イエス・キリストは主である」と公に告白して
父なる神が崇められるためです。

マルコによる福音書14章32～42節

³²一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「私が祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。³³そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく苦しみ悩み始め、³⁴彼らに言われた。「私は死ぬほど苦しい(別訳→悲しい)。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」³⁵少し先に進んで地にひれ伏し、できることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈り、³⁶こう言われた。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を私から取りのけてください。しかし、私の望みではなく、御心のままに。」³⁷それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。一時も目を覚ましていられなかったのか。³⁸誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心ははやっても、肉体は弱い。」³⁹さらに、向こうへ行行って、同じ言葉で祈られた。⁴⁰再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたが重くなっていたのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。⁴¹イエスは三度目に戻って来て言われた。「まだ眠っているのか。休んでいるのか。もうよかるう。時が来た。人の子は罪人たちの手に渡される。⁴²立て、行こう。見よ、私を裏切る者が近づいて来た。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・4月10日「棕櫚の主日」の日課主題は「十字架への道」。「受難節」最後の主日(第6主日)は、「棕櫚の主日」(カトリック教会では「枝の主日・受難の主日」と呼ばれ、主イエスがエルサレムに入城されて最後の週間を過ごされたことを想起する「受難週(聖週間/聖なる一週間)」の初日に位置づけられる。この週に、教会は、主イエスが最後にエルサレムに入られたことから始め、最後の晩餐、ゲッセマネの祈りを経て逮捕、裁判、十字架刑、死と葬りを記念する。特に、木曜日、金曜日、土曜日は「聖なる三日間」として記念され、木曜日、金曜日は「洗足木曜日」、「受難日」の呼称も用いられる。

・「棕櫚の主日」の聖書日課には、通常の聖書朗読三箇所のほか、「エルサレム入城」を記念する「入堂行列」で用いられる聖書箇所が定められている。「入堂行列」には、旧約から「ゼカリヤ書」の預言、福音書から「マルコ福音書」のエルサレム入城の箇所。通常の福音書日課は、「マルコ福音書」から、ゲッセマネの祈りの箇所。旧約聖書日課は、「イザヤ書」から「主の僕の忍耐」と呼ばれる箇所。使徒書日課は、「フィリピの信徒への手紙」から、「キリスト賛歌」の箇所。

入堂行列・旧約(ゼカリヤ 9章より)

・「ゼカリヤ書」は、正典「後の預言者」の第四部「十二小預言者」の11番目に置かれた預言書で、「ダレイオスの第二年」という日付と「イドの孫でペレクヤの子である預言者ゼカリヤ」という名が標題として付された預言書。この「預言者ゼカリヤ」は、「エズラ記」5:1 および同6:14に登場し、同じ「十二小預言者」に数えられる「預言者ハガイ」と同時期に活動したと考えられる。「ダレイオス」は、ペルシアの王で、在位は前522～486年ごろ。

・入堂行進に際して必ず朗読される旧約箇所は、四福音書が共通して伝える主イエスのエルサレム入城に際しての「子ろば」に関する預言。

入堂行列・福音書日課(マルコ 11章より)

・主イエスの「エルサレム入城」の記事は、四福音書が共通して伝えており、細部の異同はあるが、概ね共通した内容になっている。象徴的な事柄として、①「子ろば」の使用、②「なつめやし」などの「枝」を用いた歓迎、③「詩編」118:25～26による歓呼、などが共通する骨格となっている。

・この逸話記事において「マルコ福音書」に特徴的な点は、①子ろばに乗って主イエスを迎えた人々に対して、それに批判的な人々(ファリサイ派など)の描写が含まれないこと、②入城後に神殿境内や城内を見て回ると一旦城外の町に退かれたとの記述が置かれていること、が挙げられる。「マルコ」は、エルサレムのユダヤ人の対決姿勢を必ずしも強調しないで「受難物語」を描いていく意図があったと考えられる。

旧約日課(イザヤ 50章より)

・「イザヤ書」は、旧約三大預言書の一つで、ユダヤ正典「後の預言者」の第一に置かれている。一般に、39章までと40章以下で時代背景が異なることから、後者は「第二イザヤ」と区別される。日課箇所は、「第二イザヤ」中、「主の僕」と呼ばれる人物が描かれる箇所の一つ。

・「主の僕」は、特定されない人物であるが、「第二イザヤ」において神の御業が反抗する民に対して遂行されるために犠牲的に用いられる人物として描かれており、過去の預言者等も含めて、ある種の神学的帰結によって生み出された「信仰者」の姿と考えられる。

使徒書日課(フィリピ 2章より)

・「フィリピの信徒への手紙」は、使徒パウロが自らの宣教団を組織して最初に開拓創設したフィリピの教会に宛てた書簡。記された内容から、パウロが獄中で記したと推認され(1:12～14など参照)、「獄中書簡」とも呼ばれる。また、そのようなパウロの置かれた状況にもかかわらず、繰り返し「喜ぶこと」が勧められており、「喜びの手紙」と呼ぶ者もある。

・日課箇所の内、6節以下は詩文様式で描かれており、初期教会で定型化された「賛歌」として伝えられているものを引用していると考えられている。一方、キリストの出来事が徹底した謙遜として描かれていることから、ここに描かれる事柄を「キリストの謙卑」という特別な用語で取り上げることもある。

福音書日課(マルコ 14章より)

・日課箇所は、主イエスが弟子たちとの「最後の晩餐」を終えて、オリーブ山の麓にあった「ゲッセマネ」(「搾り場」の意)で祈られたことを伝える逸話。イスカリオテのユダを除く11人の弟子を連れている状況であるが、主イエスの祈りに立ち会ったのは3人の弟子(ペトロ、ヤコブ、ヨハネ)だけであったという設定になっており、「主の変容(山上での変貌)」の出来事などと共に、特別な扱いで描かれていることが分かる。「マルコ」福音書でこの3人だけが主イエスに伴ったとされるのは、①ヤイロの娘の癒しの場面(5:37～)、②高い山での主の変容の場面(9:2～)、③ゲッセマネの祈りの場面(14:33)、の三場面のみ。近似する状況として、④ヤコブとヨハネが主イエスに願い事を申し出る場面(10:35)、⑤この三人にアンデレを含めた四人が、オリーブ山から神殿を眺める主イエスに問いをした場面(13:3～)、も挙げることができる。

・祈りの描写は、三度の繰り返りで描かれ、主イエスの祈りの姿に対して、目を覚ましていられずに眠ってしまう弟子たちの姿が対照的に描かれる。弟子たちの「眠り」は、生理的な状況説明というよりも、より象徴的な意味合いで描き込まれていると言える。

・三度の祈りは同じ言葉であったとされ(39節)、36節に集約されている。

・42節「裏切る者(ハラデイトース)」は「引き渡す者」の意。

来週の誕生日 (4月10日～16日)

主日礼拝の讚美歌から

- 21-307 番「ダビデの子、ホサナ」は、スウェーデン語聖書のマタイ 21:9 の聖句に、18 世紀末スウェーデン国王の招きで活動したドイツ人音楽家フォクラーが作曲。スウェーデンおよびフィンランドの福音ルーテル教会讚美歌集で 1 番に収められた待降節第 1 主日用の讚美歌。フィンランド語版からこども讚美歌に採用され、棕櫚の主日の聖句であることに即して受難節ことに棕櫚の主日用の讚美歌として採用。
- 21-305 番「イエスの担った十字架は」は、現代オランダの牧師で現代語訳詩編歌や讚美歌集編纂にも携わったバルナルトの作詞(独語訳版からの重訳)。曲は、オランダのカトリック司祭シュッターの作曲。
- 21-311 番「血しおしたたる」(= I 136 番)は、12 世紀フランスの神秘思想家クレルヴォーのバルナルドゥスの弟子であるシトー会修道士アルヌルフ・フォン・レーヴェンのラテン詩に基づいて、17 世紀ドイツを代表する讚美歌作家 P. ゲルハルトが作詞。曲は、ルター派の作曲家ハンス・レオ・ハスラーが恋愛歌「わが心は千々に乱れ」として作曲した旋律で、1613 年出版のコラール集「聖なる調和」に「心より憧れ望む」の曲として採用されていたものが、1656 年出版の讚美歌集「歌による敬虔の訓練」でゲルハルトの歌詞と結びつけられた。原曲は 21-310 番のリズムだったが、「血しおしたたる」と結びつけられるまでに 21-311 番のリズムに改変された。バッハの「マタイ受難曲」等で使用されている。
- 21-531 番「主イエスこそわが望み」(= I 358「こころみの世にあれど」)は、8 世紀頃のアイランドの修道院に遡るとされる古いアイランド語讚美歌で、20 世紀初頭に英訳されたアイランド民謡集に収録されてから英語圏で広く讚美歌集に採用されるようになった。『讚美歌 21』では英語 3 節版に基づいて改訳されている。

21-307「ダビデの子、ホサナ」

Hoosianna, Daavidin Poika

21-305「イエスの担った十字架は」

Met de boom des levens

1. Met de boom des levens / wegend op zijn rug / droeg de Here Jezus / Gode goede vrucht.
- (Re) Kyrie eleison, / wees met ons begaan, / doe ons weer vrijzen / uit de dood vandaan.
2. Laten wij dan bidden / in dit aardse dal, / dat de lieve vrede / ons bewaren zal, (Re)
3. Want de aarde vraagt ons / om het zaad des doods, / maar de hemel draagt ons / op de adem Gods. (Re)
4. Laten wij God loven, / leven van het licht, / onze val te boven / in een evenwicht, (Re)
5. Want de aarde jaagt ons / naar de diepte toe, / maar de hemel draagt ons, / liefde wordt niet moe. (Re)
6. Met de boom des levens / doodzwaar op zijn rug / droeg de Here Jezus / Gode goede vrucht. (Re)

21-311「血しおしたたる」

O Haupt voll Blut und Wunden

1. O Haupt voll Blut und Wunden, / voll Schmerz und voller Hohn, / o Haupt, zum Spott gebunden / mit einer Dornenkron, o Haupt, / sonst schön gezieret / mit höchster Ehr und Zier, / jetzt aber hoch schimpfieret: / begrüßet seist du mir!
2. Du edles Angesichte, / davor sonst schrickt / und scheut das große Weltgewichte: / wie bist du so bespeit, / wie bist du so erbleichet! / Wer hat dein Augenlicht, / dem sonst kein Licht nicht gleichet, / so schändlich zugericht'?
3. Nun, was du, Herr, erduldet, / ist alles meine Last; / ich hab es selbst verschuldet, / was du getragen hast. / Schau her, hier steh ich Armer, / der Zorn verdient hat. / Gib mir, o mein Erbarmen, / den Anblick deiner Gnad.
4. Erkenne mich, mein Hüter, / mein Hirte, nimm mich an. / Von dir, Quell aller Güter, / ist mir viel Guts getan; / dein Mund hat mich gelabet / mit Milch und süßer Kost, / dein Geist hat mich begabet / mit mancher Himmelslust.
5. Ich will hier bei dir stehen, / verachte mich doch nicht; / von dir will ich nicht gehen, / wenn dir dein Herze bricht; / wenn dein Haupt wird erblassen / im letzten Todesstoß, / alsdann will ich dich fassen / in meinem Arm und Schoß.
6. Es dient zu meinen Freuden / und tut mir herzlich wohl, / wenn ich in deinem Leiden, / mein Heil, mich finden soll. / Ach möcht ich, o mein Leben, / an deinem Kreuze hier / mein Leben von mir geben, / wie wohl geschähe mir!
7. Ich danke dir von Herzen, / o Jesu, liebster Freund, / für deines Todes Schmerzen, / da du's so gut gemeint. / Ach gib, dass ich mich halte / zu dir und deiner Treu / und, wenn ich einst erkalte, / in dir mein Ende sei.
8. Wenn ich einmal soll scheiden, / so scheid nicht von mir, / wenn ich den Tod soll leiden, / so tritt du dann herfür; / wenn mir am allerbängsten / wird um das Herze sein, / so reiß mich aus den Ängsten / kraft deiner Angst und Pein.
9. Erscheine mir zum Schilde, / zum Trost in meinem Tod, / und lass mich sehn dein Bilde / in deiner Kreuzesnot. / Da will ich nach dir blicken, / da will ich glaubensvoll / dich fest an mein Herz drücken. / Wer so stirbt, der stirbt wohl.

21-531「主イエスこそわが望み」

Be thou my vision

1. Be thou my vision, O Lord of my heart, / be all else but naught to me, save that thou art; / be thou my best thought in the day and the night, / both waking and sleeping, thy presence my light.
2. Be thou my wisdom, be thou my true word, / be thou ever with me, and I with thee Lord; / be thou my great Father, and I thy true son; / be thou in me dwelling, and I with thee one.
3. Be thou my breastplate, my sword for the fight; / be thou my whole armor, be thou my true might; / be thou my soul's shelter, be thou my strong tower: / O raise thou me heavenward, great Power of my power.
4. Riches I heed not, nor man's empty praise: / be thou mine inheritance now and always; / be thou and thou only the first in my heart; / O Sovereign of heaven, my treasure thou art.
5. High King of heaven, thou heaven's bright sun, / O grant me its joys after victory is won; / great Heart of my own heart, whatever befall, / still be thou my vision, O Ruler of all.